

## 中学校教育における「書くこと」指導のあり方に関する一考察

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター

近年の社会状況の急激な変化に伴い、子どもたちを取り巻く環境もまた、大きな変化にさらされている。それに対処すべく施行された第七次学習指導要領だったが、「生きる力」を育むための「ゆとり教育」推進の裏で、学力低下という困難な問題が生じていた。その中の一つである、「作文能力の低下」を改善するには、現代の「書くこと」指導の在り方をどのように改めていけばよいのか。それを考えるためにはまず、現在の状況を生み出した過去の学習指導要領を再度考察する必要がある。これまで六度の改訂を経てきた学習指導要領だが、「書くこと」指導においては、生徒の思考力や表現力の育成を重視するという姿勢をほぼ一貫している。にもかかわらず、これらの獲得が達成されないのは、毎回の改訂がすべて社会からの要望に応じたものであるために、その獲得過程の指導法が一定しなかったためである。急激な方針転換を繰り返した結果、獲得が期待された能力はほとんど定着しないまま現在に至っている。そもそも文部科学省の方針には思考力・表現力を特別視する傾向がある。それらは確かに重要な能力に違いないが、その定着のためにはより基礎的な能力の獲得が不可欠であるはずである。

現行の学習指導要領ではさらに、「個に応じた指導」の重要性が謳われている。作文が文字による自己表現である以上、その重要性は一際増すはずであるが、文部科学省や国語科の考える「個に応じた指導」は、個人のレベルに合わせた少人数化習熟度別指導のことであり、さらに生徒の自由な科目選択ができる環境を整えることとの認識である。これだけでは「書くこと」指導の中での個性の育成は望むべくもなく、再び能力主義に陥る危険性をはらんでいると言える。筆者の勤務校でも第三学年時には少人数講座制を導入し、「表現」に焦点をあてた指導を行っている。だが、生徒たちの作文分析を通じて言えることは、総じて基礎・基本の定着が成っていない。土台がないまま、その上に思考力・表現力といった能力を築くことはできない。また本校のような一年間を通じての集中的な「書くこと」指導にもかかわらず、できあがった作文を十分に吟味する時間がないなどの理由から、学習指導要領の指導内容をすべて達成できているとは言い難いというのが現状である。我々は今一度、「書くこと」指導が、誰の何のためのものであるかという出発点に立ち返るべきである。能力の獲得のためには基礎基本の定着が不可欠であり、そのためには生徒たちの書くことへの意欲が伴わなくては意味がない。その意欲を持たせるために、生徒に「書きたい」と思わせる動機づけを行うことこそがもっとも重視されるべき点であり、それが結果的に生徒の個性に迫ることになるのではないだろうか。